SDGs 地域共創型プログラム

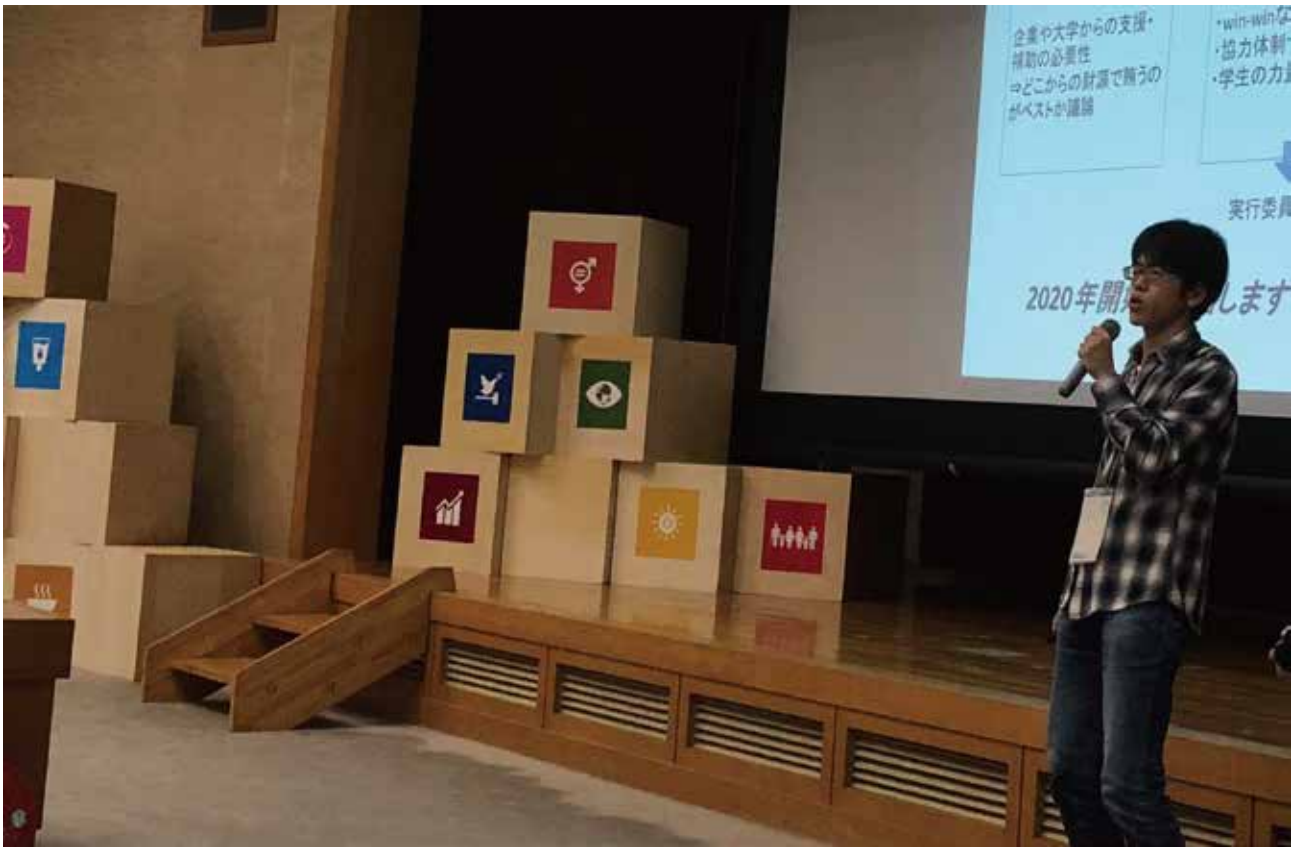
むらのこ

2018-2019 Report

立命館大学 むらのこ運営委員会

平成 30 年度滋賀県内大学 SDGs 普及促進等支援助成金により制作

報告書作成にあたって



キャンパス SDGsでの発表の様子

本報告書は、2018 年 12 月中旬から 2019 年 2 月 3 日にかけて実施した SDGs 地域共創型プログラム「むらのこ」の活動成果をまとめたものです。本プログラムは地域の抱えている問題を自分事として考え、甲賀市フィールドワークやイノベーションワークショップでを経て、地域課題を解決プランを考える 1 か月半のプログラムです。2017 年 12 月に滋賀県が開催したキャンパス SDGs(参考 :SDGs.TVhttps://sdgs.tv/sdgs/1233.html) で最優秀賞を受賞した「村の子プロジェクト」から約 1 年を経て、プログラム終了後も学生が継続的に活動を続けてもらうにはどのようにすればよいかを考え抜きこのプログラムを作り上げてきました。そして、様々な方にご協力していただきながら無事プログラムを実行することができました。本報告をきっかけに、プログラムで生まれたアクションプランの実現に向けて引き続き精進して参ります。

SDGs 地域共創型プログラム「むらのこ」
村長 (代表) / 立命館大学 理工学部 3 回生
松村 有真

©2018-2019 Muranoko

目次

「むらのこ」について

P.04　滋賀県甲賀市について
P.04　SDGs とは
P.05　プログラム概要
P.05　開催概要

コンテンツ紹介

P.07-08　イノベーションワークショップ (12/22-23)
P.09-11　甲賀市フィールドワーク合宿 (1/5-6)
P.12-13　成果報告会 (2/3)
P.14　活動調査

プロジェクト紹介

P.16-17　AKIYA★BRAND (I`m home)
P.18-19　リラッコミュ (チーム @ たぬき)
P.20-21　事業継承の町、『甲賀』。(むらのこう会社)
P.22-23　甲賀の魅力を学びにいこうか (むらのこ学校たぬき組)

総評

P.25-26　関係者からの総評

付録

P.28　フォトギャラリー

©2018-2019 Muranoko

「むらのこ」について

©2[illegible]2019 Muranoko

滋賀県甲賀市について

甲賀市は、2004 年に旧甲賀郡の 5 町 (水口・土山・甲賀・甲南) が合併し誕生しました。滋賀県東南部に位置し、近畿圏と中部圏をつなぐ広域交通拠点となっています。甲賀市の面積は県土の約 12%を占め、野洲川・杣川・大戸川沿いに平地が開けています。さらに、森林も多く琵琶湖の水源涵養、水質保全にも重要な地域となっています。全国的には信楽焼や甲賀忍者、東海道沿いの宿場町が有名で、外国人観光客も増加傾向にあります。しかしながら人口減少や、少子高齢化が進行しているというのが現状であり、それを食 い止め、「誰もが主役となり、持続可能なまち」となることを目標にしています。

(参考 :「甲賀市の紹介)

http://www.city.koka.lg.jp/1117.htm

また、2017 年 11 月に立命館大学とこれまで教育研究にかかわる個別の取り組みを通して築いてきた相互の協力関係を踏まえ、さらなる連携・協力を進め、地域社会の発展に寄与することを目的として、包括協定を締結しました。

（参考 : 立命館大学)

http://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=896

滋賀県の地図

信楽焼の店舗 (甲賀市信楽町)

SDGs とは

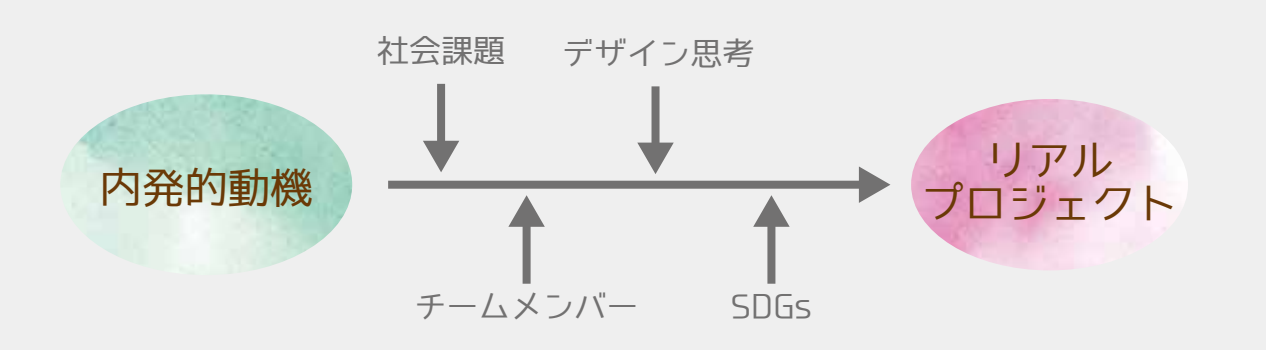
SDGs のアイコン

SDGs（Sustainable Development Goals）は、2015 年 9 月に国連の持続可能な開発サミットにて採択されました。近年 では、大学の世界ランキングの評価項目に SDGs が 2019 年から 追加されたりと、私たちの身近なところ、教育機 関でも SDGs を推進していく動きがみられます。また、日本でも SDGs への取り組みは急激に加速化してきています。2020 年に行われる「東京オリンピック・パラリンピック」や、2025 年に開催される「2025 大阪・関 西万博」では、SDGs に積極的に取り組んでいくことを宣言して います。達成期限である 2030 年を目指して、全世界が 一致団結して取り組んでいくような土台が出来上 がってきたように感じます。

©2018-2019 Muranoko

プログラム概要

キャンパス SDGs で発表したプランでは、甲賀市に大学生が 1 年間住み、地域創生に貢献するというものでした。そのプランを、よりサステイナブルに企画が実施できるように配慮し、さらに SDGs が共通言語として世界とつながるツールとなるようにな企画の修正を行いました。その結果、大学生の内発的動機と地域課題解決を満たすプロジェクトにより地域の自律 (サステイナビリティ) を実現するプログラムとなりました (下記参照)。テーマを地域の自律 (サステイナビリティ) とし、立命館大学の学生が地域の過去、現在、未来を考えリーダーの役割を担います。そこで、4 名のプロジェクトメンバーが中心となって滋賀県内外の高校生から大学生まで参加者を募り、プロジェクトメンバーを集めていきました。



プロジェクト深化のイメージ

開催概要

実施期間	2018 年 12 月 ～ 2019 年 2 月
実施場所	立命館大学びわこ・くさつキャンパス 甲賀市内・甲賀市役所 キャンパスプラザ京都
参加費用	高校生 1,500 円 / 大学生 3,000 円
主催	立命館大学 むらのこ 運営委員会
代表	松村 有真 (立命館大学 理工学部 3 回生)

協力・後援 (順不同)

滋賀県

甲賀市

立命館大学 EDGE+R
イノベーション・アーキテクト
養成プログラム

立命館大学
Sustainable Week 実行委員会

©2018-2019 Muranoko

コンテンツ紹介

イノベーションワークショップ

日時 2018 年 12 月 22-23 日
場所 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス　エポック立命 21

甲賀市役所職員の方によるレクチャー

-Day 1-

甲賀市によるレクチャー

甲賀市役所の職員の方をお招きし、本プログラムを実施するフィールドである甲賀市の実態についてレクチャーして頂きました。甲賀市の魅力や課題を様々な観点から知ることができました。甲賀市の今を知ることができ、プロジェクトを考えていく上でとても貴重な時間になりました。

パソコンでそれぞれのテーマについてリサーチしている様子

イノベーション ワークショップ①

今回のワークショップにおける１日目のテーマは「アイデア発散」でした。今まで自分たちが考えたことがないような課題や、初めて知った内容に関して、イノベーションのフレームワークを用いながら思考・議論を重ねたアイデアの発散を行いました。実際にどのようなアイデアが甲賀市には必要なのか、そのためには何を調査し、どのようなことをする必要があるのかを考えました。

クリスマスパーティー（交流会）の様子

クリスマスパーティー

ワークショップ終了後に、懇親会を兼ねてクリスマスパーティーを実施しました。2018 年の振り返りや、ビンゴ大会を行いました。甲賀市の料理が振る舞われたり、ビンゴ大会で、滋賀県イチオシの品種である「みずかがみ」を使用した甲賀市産の甘酒（ノンアルコール）が景品であったりと甲賀市の魅力を感じながら、チームメンバーとの親睦を深めることができました。

©2018-2019 Muranoko

アイデア発表

フィードバック・アイデア整理

-Day 2-

むらのこキャラバン

学生の地域活動の先駆者として戸簾 隼人さん（生命３）と渡邊 里々子さん（理工４）に今までの活動などを、個人の背景ももとに講演をして頂きました。

イノベーションワークショップ②

イノベーションワークショップ①で発散したアイデアを収束させました。それぞれのチームでどのようなことを甲賀市で調査していくのかをまとめチーム内でパワーポイント資料にする作業を行いました。

発表・フィードバック

２日間のイノベーションワークショップを通じて、甲賀市で実施していくプランを発表しました。各チームメンバーをシャッフルしてそれぞれのプロジェクトのフィードバックを行いました。様々な方との意見交流を通じて新たな視点を発見することができました。

行動計画作成

イノベーションワークショップを踏まえ、甲賀市で実施するフィールドワークの行動計画を作成しました。それぞれのプロジェクトを実施するため調査したい場所や現地の方などをチーム内で意見を出し合いました。メンターの方や顧問の小沢先生からアドバイスを頂きながら計画を考えました。

参加者の声

イノベーションワークショップでは、自身の発想力の向上が図れたように思います。また「AKIYA☆BRAND」のチームの一員として先輩方と意見を交流しあうことでお互いのスキルアップにも繋げることができました。

特に印象に残っていることは、メンターの戸簾さんが、私が出したアイデアから発想を転換させ、さらに新しいアイデアへと発展させてくださったことです。そこで、私は自身の発想力の低さを思い知らされると共に、戸簾さんの柔軟な発想力に憧れを抱きました。まだまだ先輩方ように、即座にアイデアは浮かびませんが、この「むらのこ」を通じて少しずつ成長していきたいと思います。

近江兄弟社高校 ３年 / 佐橋 果南汰（立命館大学進学予定）

©2018-2019 Muranoko

甲賀市フィールドワーク合宿

日時 2019 年 1 月 5-6 日
場所 甲賀市内 (現地視察)、甲賀市役所 (中間報告会)

中間報告会

現地視察

各プロジェクトに関する施設・企業の見学や、甲賀市で働いている方への取材を、各自でアポイントメントを取ったうえで行いました。そこで得られた知見や、現場で改めて気づいたことや、はじめて明らかになったことを活かし、アイデアを各チームでブラッシュアップをして、2 日目に行われる中間発表に向けての準備を行いました。

SDGs 講演会

中間報告

フィールドワークでの活動内容や、得られた成果からプロジェクトの現状を各チーム発表しました。フィールドワークを経て、修正されたプロジェクト理念、それに合わせた企画内容が新たに提案されました。発表後は、甲賀市役所職員の方、小沢先生、林田甲賀市議会議長、BKC 地域連携課の大藪さん、4 チームのメンバーを交えフィードバックを行いました。

フィードバック・アイデア整理

SDGs 講演会

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会の創設者である、上田 隼也氏を講師としてお招きしました。地域課題を学生主体で解決していく上で、SDGs をどのようにとらえて、活動に活かしていくべきかについて、社会背景や実践例をもとにお話をしていただきました。

参加者の声

イベントを夏休みなどの長期休みに行う、あまり有名でない陶芸家の方に陶芸を教えてもらう、など実現するための様々な意見を頂きました。実現可能性が高いと言って頂けましたが、今後実現していく上でこちらの要望と合致する団体や企業があるのか、などの課題があります。内容を具体化するなかで甲賀市の魅力を更に知り、プロジェクトに繋げていきたいと思いました。

滋賀大学 経済学部 1 回生 / 兒玉 彩花

©2018-2019 Muranoko

各チームの現地視察の内容

I`m home

空き家の現状や、実際に空き家がどのように使われているかを調べました。1 日目は不動産屋に赴き、空き家の現状についてインタビューをして、特に空き家が多い山間地域では、交通の便の悪さや老朽化が原因で、購入する方が少ないことが分かりました。しかし、旧東海道沿線上や、その近辺の空き家には需要があることも分かりました。しかし、古い空き家は改修が全く進んでおらず、今にも壊れそうな危険な場所もありました。2 日目には、実際に使えそうな空き家を見に行きました。リノベーションされた空き家は、日本家屋のようなものでも一部の基礎部分が強化され、中も洋風なフローリングになっているものもありました。予算としても、月々 6 万円程度でレンタルできることに驚きました。

数多くの場所を散策し、実際に現地に赴くことで座学では分からない現地の実態がありました。貴重な体験をすることができました。

空き家周辺の散策

内覧した空き家の外観

信楽温泉 多羅尾の湯

つばきの湯

ちーむ @ たぬき

私たち温泉チームは、この 2 ヶ月間、甲賀市の温泉を様々な角度から考えさせていただきました。メンバーも初めは温泉というものを一般的な温泉としてしか捉える事が出来ず、温泉の可能性というよりかは甲賀市のそれぞれの温泉は一体どのような立ち位置で地域の方に利用されているのかという視点から活動を始めてまいりました。

フィールドワークにて現地調査を行なう上でようやく温泉について一般的な温泉だけではなく、地域のコミュニティとしての活用や、高校生の憩いの場であったり、観光客向けの温泉であったりと温泉の多様な考えができるようになりました。

温泉のいろいろな付加価値を見つけることで温泉を温泉の価値ではなく、既存のサービスを温泉を通じて新たな活用をしていくようなことに関して調査を進めていきました。

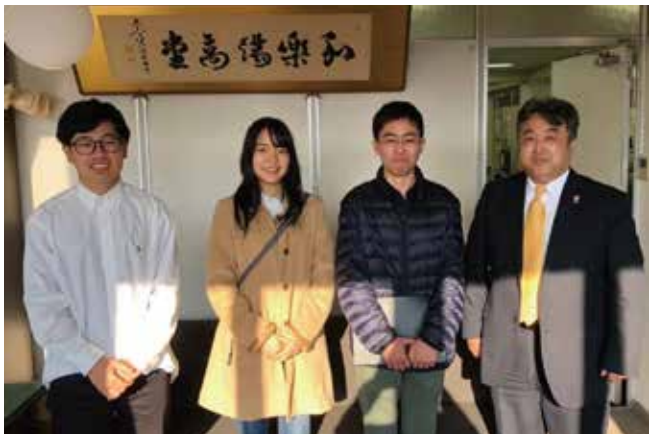
©2018-2019 Muranoko

むらのこう会社

１日目には甲賀市商工会議所を訪問しました。信楽地区にある数多くの中小企業の過去・現在・未来にわけ、お話を伺いました。数多くの企業が家族経営をされていることや承継問題などがある事実を聞く、貴重な時間となりました。途中で建設業を営む棟梁の方が来られ、継承に成功した事例などを聞くことができました。

次に訪問したのは信楽陶芸村です。実際に陶芸体験をさせて頂きました。作成することが大変困難でした。伝統文化として身につけるには長い歳月を必要とすることから、技術継承の難しさを知りました。130 年続く老舗である信楽陶芸村も主に家族企業ということでした。

２日目は地元甲賀市出身の大学生２名と甲賀市についてディスカッションしました。甲賀市の良いところから不便なところまで幅広く現地の生活について教えて頂きました。交流する中で、地方都市の地形や歴史が人々の社会性を大きく反映させていることが再確認できました。



甲賀市商工会 取材

甲賀市 陶芸村

Woody Work OKADA ギャラリー見学

鮎河小学校 施設見学 (理科室)

むらのこ学校たぬき組

今回のフィールドワークは閉校になっている鮎河小学校の見学、甲賀市の魅力を探しに行くことを目的に行いました。

１日目は、鮎河小学校の見学、Woody Work OKADA さんへの見学に行きました。

小学校の見学では、規模感や使えそうな設備などを確認しました。そして、市役所の方のお話をもとに小学校を使用するにはどうすればいいのかなどアドバイスをいただきました。Woody Work OKADA さんは、放置されている茶畑の茶の木を活用して、食器を制作されています。このような地域の資源を上手く活用されている取り組みを、地域外の人に発信していける企画を立案しようと思いました。

２日目は甲賀もち工房の河合さんにお話を聞きに行きました。もち米の栽培、もちの製造・販売までを行う６次産業でのまちおこしをされているお話や、これまでの地域で行ったイベントについて取り上げられた記事や番組などを紹介していただきました。

©2018-2019 Muranoko

成果報告会

日時 2019 年 2 月 3 日 10:30-13:00
場所 キャンパスプラザ京都 2F ホール

成果発表

成果発表

4 チームがイノベーションワークショップやフィールドワークを経て、創り上げたプロジェクトや今後のアクションプランについて発表しました。発表後には審査員からの質疑応答も行いました。

意見交換会

意見交換会

発表中、オーディエンスの方々に、各チームに対するコメントを付箋に書いていただきました。それをもとに、チームごとに分かれ、オーディエンスの方々と発表者で、提案されたプロジェクトについての意見交換会を行いました。

質疑応答

審査員の方々

今回の成果報告会では地域創生に関わる方々やフィールドを提供してくださった甲賀市・滋賀県の方々、イノベーションを専門に活躍されている方に審査員としてプロジェクトを評価していただきました。SDGs の視点 (経済・社会・環境)、地域の課題、新規性・独創性、プレゼンテーション、実現可能性を基準に評価され、最優秀賞・甲賀市長賞 SDGs オーディエンス賞がそれぞれ評価を得たプロジェクトに贈られました。以下、5 名が審査員の方々です。

甲賀市長 岩永 裕貴 氏 (審査委員長)
BKC 社系研究機構 上席研究員 金井 萬造 氏
滋賀県 総務部私学・大学振興課 課長 前田 久永 氏
立命館大学 食マネジメント学部 准教授小沢 道紀 氏
立命館大学 生命科学部 上田 隼也 氏

審査員の方々

©2018-2019 Muranoko

結果発表

最優秀賞

甲賀の魅力を学びにいこうか
むらのこ学校たぬき組 チーム

むらのこ学校たぬき組 チーム

甲賀市長賞

AKIYA★BRAND
I`m home チーム

I`m home チーム

SDGs オーディエンス賞

甲賀の魅力を学びにいこうか
むらのこ学校たぬき組 チーム

講評

非常に興味を持って報告を聞かせて頂きました。評価指標からのコメントというよりも研究されたことが実際の社会での展開についての検討により、それまでの成果が実施されていく分野での想いや想定について概略の検討や意向・見通しについて言及されることがとても重要であると感じています。私も理系の 30 年と後半の 30 年は文系での取組みです。理系の取組みの魅力を活かし文系としての地域社会・地域経済・地域環境や地域再生・地域振興・生活と暮らしまでの分野についての関心を広げて頂ければ、ストーリー展開から見て素晴らしい報告になります。今後の取組みの発展を期待しています。自信と自覚と目的と実践課程まで見据えた展開（想い程度で良い）を期待します。ご苦労様でした。

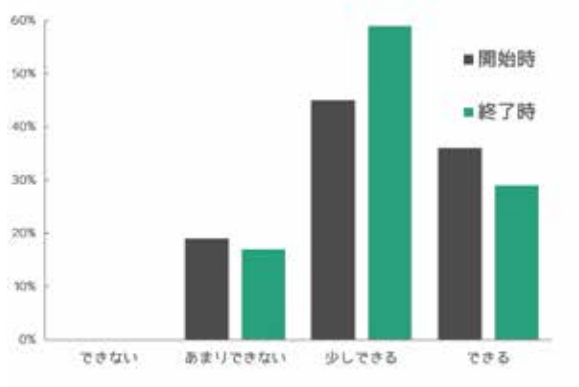
BKC 社系研究機構 上席研究員 金井 萬造 氏

©2018-2019 Muranoko

活動調査

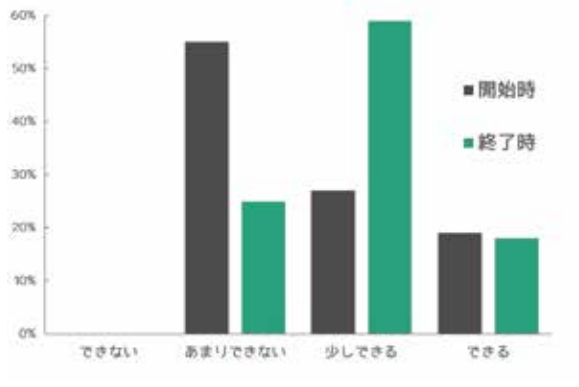
今回の参加者は 16 名であったことから、少数から集めたデータとなっています。また、本企画では参加した学生、特に理工系の学生が「主体的」、「自律的」、「責任感」と言った意識を持ち、活動するマインドを醸成することが目的の１つにあります。その定量ラベルは立命館大学 Sustainable Week 実行委員会が作成した論文の SDGs スキルから引用しています。SDGs スキルのうち、主体的な学びとして、「主体的な行動力」、自律的な学びとして「持続可能な開発マインド」、責任感を持って取り組むことを「組織の共通目標の設定・判断」に対応させて、参加者の意識変化を定量的に調べました。
（引用：戸簾 隼人・上田 隼也・切田 澄礼（2018）「キャンパスから地域と共に考える SDGs」環境工学研究 No.338 p.16）

活動の成果



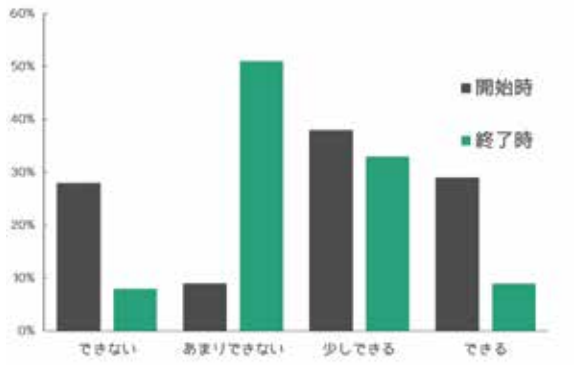
主体的な行動力

こちらは自分が関心を持ったことを実行することができるスキルです。アンケートの結果、開始時点の方が高い傾向があり、参加した学生の多くがもともと主体的な行動力を持っていたように考えられます。しかし、チーム内でより主体的な行動力を持ったメンバーと相対的に比較したことで、終了時点のほうが低いと感じる方が多くなったかと考えられます。



持続可能な開発マインド

こちらはグローバルに考え、社会の変化にはローカルに適応・行動することができるスキルです。結果は「少しできる」の割合が多くなりました。ある学生は開始時点では理由に「グローバルに考えるのは難しい」と答えていましたが、終了時点で「自分のできることから地域全体への効果を考えることができた」と答えていました。このような、自分ごとへの落とし込みを促せたと推測できます。



組織の共通目標の設定・判断

こちらはそれぞれの考えを組織内で共有でき、それらを理解した上で共通目標を設定し周辺の活動状態を把握した上で、適切な判断ができるスキルです。結果として、開始時点に比べて「あまりできない」と答えた学生の割合が増加しました。こちらは上方修正した学生は、チーム内での話し合いやフィードバックなどを通じて、共通認識を持てたと考えられます。また下方修正した学生は、新たに結成したチームでその力が発揮できなかったのではないかと推測できます。

プロジェクト紹介

©2[illegible]2019 Muranoko

プロジェクト No. 1

AKIYA★BRAND

I`m home チーム

プロジェクト理念

VISION

高校生に甲賀市の魅力や良さを伝える。
甲賀市に帰ってきたいと思わせる！

MISSION

空き家の新たな活用によって、
市民を定着させ活発な甲賀市になる。

VALUE

甲賀にしかない
”甲賀ブランド”を作る

プロジェクト概要

空き家を学生にとっての第２の家＝秘密基地として提供します。本プロジェクトでは、学生にとって、学生との繋がり・地元とのかかわり・それを通した外部への発信が出来るような仕組みを作ります。普段は、勉強や映画鑑賞ができる場所として開放し、そこに地元企業などを誘致して地域の文化を若い世代に知ってもらうことで、「地元愛」を芽生えさせます。そんな魅力を知った学生は、将来甲賀市外に出ても、魅力を知っている人は、友人や同僚に甲賀市の魅力を話すことが出来ます。それにより、外部へ甲賀市の魅力がどんどん拡大していくと考えています。

活動の成果

甲賀市の風景

中間発表会の様子

地域の持続可能性とは

この２ヶ月間、空き家の問題を通して、地域の持続可能性を考えさせられました。このチームメンバーの出身地でも空き家問題を抱えており、自分事として捉えることができたと考えています。今回私たちのチームが１番成長を感じることが出来たのは現地視察でした。実際に現地の方に会って聞かないとわからない問題など、現地の人に会うことによって気付かされる一面が数多くありました。

アイデアを生み出す難しさ

イノベーションワークショップ時には、なかなか良いアクションプランが見いだせず、苦しみましたが、ワークショップを通じて、対象を絞ることでより案が練りやすくなることを理解し、プロジェクトを進めるに至りました。最終報告会のディスカッションでも、様々な方からアドバイスや意見などをいただきその意見を活かし、今後の活動を進めていきたいと思いました。

©2018-2019 Muranoko

アクションプラン

2019 年

３月	４月	５月	６月
物件選定 →			
	準備 →		
	利用者に向けた広報 →		

みんなの第二の家「AKIYA★BRAND」オープン

学生誰もが自分の居場所を作れる、学校とは別の「マイプレイス」を作ります。
AKIYA★BRAND には、以下二つの役割があります。

1 学生が学ぶための家

勉強や映画鑑賞、ゲームなど中高生が放課後に気軽に立ち寄って遊べる場所にするとともに、大学生と交流できる場にすることで、大学生の声を聞くことができます。

2 地元の人とつながる家

地元起業や周辺住民を誘致することで、地域文化を利用している中高生に伝え、地元の魅力を知ってもらうことで「地元愛」を芽生えさせます。

メンバー紹介

リーダー
立命館大学 理工学部 3 回生
松村 有真

立命館大学 経済学研究科 1 回生
Katorina Santos

近江兄弟社高校 3 年生
佐橋 果南汰

立命館大学 理工学部 2 回生
武田 大吾

©2018-2019 Muranoko

プロジェクト No. 2

リラッコミュ

ちーむ @ たぬき チーム

プロジェクト理念

VISION

温泉が老若男女問わない
サードプレイスになる

MISSION

甲賀市の温泉の
新たな可能性を探る

VALUE

コミュニケーションを大切にする、
参加しやすいような環境を作る

プロジェクト概要

私たちのプロジェクトは、「温泉」というものについて焦点を当てて活動を行なっております。具体的には、滋賀県甲賀市にいくつもある温泉を調査し、温泉というもののアップデートを行います。

背景として、温浴施設業界は次々と倒産に追い込まれており、滋賀県甲賀市もまた例外ではないと考えられます。その中で若者にとっての温泉という存在を考え直し、温泉というものへの価値改革を行いたいと考えました。

活動の成果

現地視察中の様子

意見交換会の様子

甲賀市での温泉とは

私たち温泉チームは、この 2 ヶ月間、甲賀市の中での温泉を様々な角度から考えました。

メンバーもはじめは温泉というものを一般的な温泉としてしか捉える事が出来ず、温泉の可能性も含めて甲賀市の温泉はどのような立ち位置で地域の方に利用されているのかという視点から活動を始めてまいりました。

コミュニティとしての活用

フィールドワークで現地の温泉の調査をし、ようやく温泉について一般的な温泉だけではなく、地域のコミュニティとしての活用や、甲賀市の高校生の憩いの場、主に観光客に対しての温泉など、温泉の多様な見え方ができるようになりました。また、最終発表の際にも自分たちが考えていた案を元に、オーディエンスの皆様から沢山のアドバイスをいただく事ができ、様々な価値観を得る事が出来ました。

©2018-2019 Muranoko

アクションプラン

2019 年

3 月	4 月	5 月
現地視察 企画内容確定	広報	

「Rits koka Onsen」イベント開催！

新たな温泉の可能性を探ろうという題材のもとに 2 回のワークショップを行います。

1 足湯ワークショップ

対象は立命館大学生、またお呼びする方は甲賀市にある企業の社長さんや甲賀市のおばちゃん、おじちゃんを考えております。
内容は自己紹介、アイスブレイク、足湯を通じたワークショップです。
ワークショップの内容は温泉の今後のあり方や甲賀市の温泉についてなど多数用意し、参加者の要望に答え、選択する予定です。

2 温泉ワークショップ

1 回目の足湯ワークショップと流れは同一で行います。足湯ではなく温泉に入りながら行いたいと思います。

メンバー紹介

リーダー
立命館大学 生命科学部 2 回生
岡村 謙一

近江兄弟社高校 3 年生
西川 天音

立命館大学 経済学部 2 回生
奴賀 葵

立命館大学 情報理工学部 1 回生
野口 博史

©2018-2019 Muranoko

プロジェクト No. 3

事業継承の町、『甲賀』。

むらのこう会社 チーム

プロジェクト理念

VISION

事業継承の町、『甲賀』。

MISSION

持続可能な企業間ネットワークの構築。

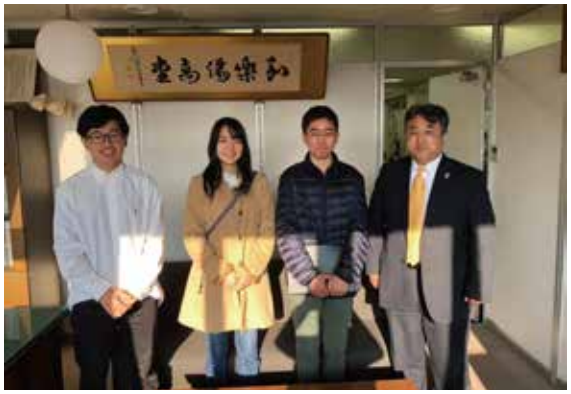
VALUE

異業種間の多様性を理解し、
新たな知見を得る。

プロジェクト概要

私達が提案するのは事業継承をテーマとし「事業継承の町、『甲賀』。」をコンセプトとしたポンポコの旅というものです。私たちは事業･伝統文化継承の問題に焦点をあて、この解決のツールの１つとして持続可能な開発目標を取り込み、その解決方法を探りました。そして甲賀市の信楽地域を中心に複数の企業に対してヒヤリングを行ったりと当事者の想いにフォーカスして企画を考えました。

活動の成果



甲賀市商工会議所への訪問

事業継承の現状

私たちは地域の事業･伝統文化が継承されず、減少していくという問題に焦点をあて解決方法を探りました。今回のプログラムでは、甲賀市の信楽地域を中心に複数の企業に対して上記の問題について聞き取り調査を行いました。そこで、家族間の摩擦で事業継承を円滑に行うことが出来ない･伝統産業は利益を出すことが難しい為、継承に対して慎重等の現状が明らかになりました。

リサーチの様子

事業継承の起点に

リサーチから、変わりゆく時代の中で文化や事業が継承されていくためには、地元企業に「変化」をもたらすきっかけが必要であると感じました。ベンチャー型企業継承と言われるように、時代の流れに合わせて、企業の魅力を新たな形にして生かしてくという流れが生まれています。私たちのチームは学生と社会の関わり合いを促進させるとともに企業の「変化」の起点となれればと思っています。

©2018-2019 Muranoko

アクションプラン

2019 年

３月	４月	５月	６月	７月	８月

合宿内容決定

企業選定

広報

「ぽんぽこの旅」合宿開催！

「ぽんぽこの旅」は、「事業継承の町、『甲賀』。」をテーマに企業の異業種間の交流することで、新たな知見を得ること、企業同士の連携が生まれることを目的としています。１泊２日の合宿形式で行い、具体的な内容として、事業継承の成功例を共有する「家業パネルディスカッション」、課題を明らかにする「現状分析ワークショップ」、時代のニーズを知る「仕事現場ツアー」を考えています。

メンバー紹介

リーダー
立命館大学 理工学部３回生
草野 吉那

立命館大学 理工学部２回生
西野 日菜

立命館大学 法学部１回生
長谷川 清秀

滋賀大学 教育学部３回生
長谷部 尚孝

©2018-2019 Muranoko

プロジェクト No. 4

甲賀の魅力を学びに行こうか

むらのこ学校たぬき組 チーム

プロジェクト理念

VISION

”We are koka family”
家族で行きたくなる甲賀。

MISSION

ファミリーで甲賀の魅力を学び
それを広げてもらう。

VALUE

関係人口の増加と
5つの地域のつながりを作る。

プロジェクト概要

今回のプログラムの成果として、閉校になった「甲賀市立鮎河小学校」の利活用を提案しました。甲賀市の地理的にも、歴史的にも隔たりがある5つの地域をつなげ、「甲賀」の魅力をファミリーが体験できる場づくりを行います。また、関係人口の増加につながるような、新しい地域の魅力発信の形を日々考えています。2019年夏に地域体験イベントの開催を目指し、今後も活動をして行く予定です。

活動の成果

アイデア出しの様子

アイデアを実現するためには

「閉校」というキーワードから、関連するキーワードを出し合い、どのように活用できるかアイデアを出し合いました。1人では思いつかなかったような利用法がたくさん生まれ、チームで考える楽しさを知りました。その一方で、大人の方に意見をいただいたことで、やりたいことと地域課題の解決をどのように実現したらよいのか考えさせられました。

鮎河小学校 教室見学

現地でしか分からない課題・魅力

閉校になった鮎河小学校の見学では、設備や広さを実際に見ることができました。また地域の人との対話を通して、地域内外に魅力を発信できるような企画が必要であることを感じました。実際に見たり、聞いたりしたことで、このプロジェクトで解決したい課題が明確になり、課題に合った理念に考え直すことができました

©2018-2019 Muranoko

アクションプラン

2019 年

3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月

協力者集め

参加者集め

1

Susutainable Week 2019
にむけて企画準備

2

1 「むらのこ学校」イベント開催！

ファミリーで甲賀の魅力を体験できるイベントを鮎河小学校で開催したいと考えています、家族向けに魅力を発信できる場づくりのモデルを作るために、まず 2019 年 8 月下旬に体験イベントを成功させます。

2 Susutainable Week 2019 で企画出展！

成果を、学生・地域住民など様々な人々が参加する Susutainable Week 2019 で成果報告を兼ねた企画を出展します。

メンバー紹介

リーダー
立命館大学 生命科学部 2 回生
中西 優奈

東京大学 医学部 3 回生
小坂 真琴

滋賀大学 経済学部 1 回生
兒玉 彩花

近江兄弟社高校 3 年生
壺井 汐音

©2018-2019 Muranoko

総評

© 018-2019 Muranoko

むらのこプロジェクトに参加されている皆様。まずは、成果報告会本当にお疲れ様でした。多くの学生の皆さんに、甲賀市のことを真剣に考えていただき、とても素晴らしい計画を披露していただいたことは、一市職員として、また一市民として本当に感動しました。

プロジェクトの開始当初から、村長の松村さんを初めとするコアメンバーの皆さんと、どうすれば事業が実現できるのかを考え、そして地域の方ともお話をさせていただいてきました。その結果がこのように大きな花を咲かせることができたのも、ひとえに、皆さんの努力の賜物であると思います。

実際にこれから考えていただいた計画を実行していくためには、様々なハードルが待ち構えていると思います。皆さんの考えてくださった計画と市の方向性、地域の課題がマッチングするものについては、しっかりと支援をさせていただき、成果報告会で咲かせた花を立派な実となるよう支えていきたいと思っています。

次につながる一歩を是非皆さんと一緒に踏み出していきたいと思っていますので、これからの活動もともに頑張っていきましょう。

甲賀市
総合政策部 政策推進課 主事
白敷 隼人

地域共創型プログラム「むらのこ」は 2018 年の秋から本格的に動き出し、2 月の初旬には成果を報告する、という時間的には余裕のないプロジェクトでした。その時間的な制約の中で、「課題だと考えるコト」を中心として、参加者を広く募り、現地を訪問して解決策を見出していけた、というのは素晴らしい点だと思います。

ただ、時間が短かったため、最初の課題意識が明確でなかったり、課題意識と現実をうまく結び付けられなかったりして、課題解決案としての最終プレゼンテーションにうまく落とし込み切れなかったチームが出たのは残念でした。

今回関わった全てのチームや参加者においては、この経験を踏まえて、具体的な行動に結びつけていく事、つまり、より実践的かつ持続的な課題の解決につながる方法を具体化していくことを期待しています。

最後に、今年度は一地域での活動でしたが、今後はより多くの地域で、より多くのチームが活動していく事を期待します。そしてまた、地域と結びついた形で課題解決方法を見出し、それを実践していくプロジェクト活動が無数に動き、社会を自らの手で少しでも良くする、という意識や姿勢、そして行動が一層活発に行われていくと信じています。

むらのこ 顧問
立命館大学 食マネジメント学部 准教授
小沢 道紀

©2018-2019 Muranoko

まずはメンバーのみなさんお疲れ様でした。短期間のうちによくぞここまで仕上げてきました。各自の役割を前向きに捉え、自発的に分担し合いながら、チーム全体としての完成度を高めていく姿には感心するばかりでした。成果報告会に向け、現地に実際に足を運んで現状を観察し、地域の方々から直接話を伺うことで、各人のそれまでの経験と頭の中で考えてきたことがしっかりとリンクして、地域の何が課題で、何を解決すべきか、今後の取り組むべき方向性がやっと見えてきたのだと思います。一筋縄ではいかないと思います。しかしながら幸運なことに、これで終わりではありません。まさに取組みが始まろうとしているにすぎないからです。一方で、計画がどれほど素晴らしいものであっても現実にはうまく進まないものです。地域の方々をはじめとした関係者たちを動かしていくにはメンバーたちの熱い情熱が絶対に不可欠です。
目指すべきゴールを見据えながら時には苦しんで、時には楽しんで、しかし誠意を持って真剣に精一杯活動を継続していってください。メンバーへの期待は相当大きくなっていると思われます。課題解決に向けて一歩でも二歩でも前進することを期待しています。

立命館大学
総務部 BKC 地域連携課 課長補佐
大藪 康成

メンバーの皆さん、お疲れ様でした。僕はメンターとして昨年末より関わらせていただきましたが、2月３日の成果報告会までの約２ヶ月間メンバーの皆さんが現地視察を行い、その結果を基に企画案に反映していく様子を近くで見させていただきました。４つある企画とも、各班４、５人の少ないメンバー構成で、最後にはそれぞれ特色のある企画案に仕上がったことは大変素晴らしいことだと思います。
ようやく企画が形になり、メンバーの皆さんは一段落していると思います。これから、実践する段階に移っていきますが、今回の企画を立ち上げる２ヶ月間の体験が次のステップでも必ず生きてくると思うので、心配せずアクティブに活動を続けていって欲しいです。また、プロジェクト全体として発展するために、是非とも新しいメンバーを増やすことにも積極的に取り組んで欲しいと思います。
最後に、皆さんの活動が期待されているものよりも良い結果になるところを近くで見させていただきたいと思います。

むらのこ メンター
理工学部 ロボティクス学科 ３回生
奥山 拓

©2018-2019 Muranoko

付録

SUSTAINABLE
WEEK

SUSTAINABLE

SDGs 地域共創型プログラム むらのこ 2018-2019 Report

発行日	2019 年 3 月 23 日
発行者	立命館大学 むらのこ運営委員会
著者	中西 優奈　（立命館大学 生命科学部２回生）
	松村 有真　（立命館大学 理工学部３回生）
	草野 吉耶　（立命館大学 理工学部３回生）
	岡村 謙一　（立命館大学 生命科学部２回生）
	上田 隼也　（立命館大学 生命科学部５回生）
	戸簾 隼人　（立命館大学 生命科学部３回生）
協力・後援	滋賀県
	甲賀市
	立命館大学 EDGE+R(イノベーション・アーキテクト養成プログラム)
	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

本書に掲載されている企業・団体、活動は 2019 年 3 月時点のものです。

SDGs
to Transforming our world